

TAKAOKA DESIGN & CRAFT CENTER  
NEWS LETTER

2019

3

March

vol.03

COVER STORY 人の役に立てるものを - (株)雅覧堂 代表 和田隆史さん -

最新情報 ◆ 生型鋳造法が伝統的工芸品に追加指定  
文化財の修復、再現に生きる高岡の技

事業紹介 ◆ 商品開発研究会「課題のデザイン」  
伝統産業人材養成スクール「3D造形コース」



雅覧堂 がらんどう

富山県高岡市定塚町1239（高岡大仏となり）

☎ 0766-22-3623

<https://www.rakuten.ne.jp/gold/garandou/>

🕒 10時～19時

📅 日曜

## 人の役に立てるものを

株式会社 雅覧堂 代表 和田隆史

お店に入ると小さな置物やかわいらしい絵付けが施された  
工芸品が並ぶ。新しいけどどこか懐かしい温かさを感じる  
空間に古道具の仕器が調和する。

ここは高岡大仏の隣に今年1月、リニューアルオープンした「雅覧堂」。高岡銅器、漆器を含め日本各地の工芸品や民芸品を独自のコンセプトで選んだセレクトショップだ。

雅覧堂の創業は明治42年、和田清平により漆器屋を始めたことに遡る。どういう経緯があつてか次の代には漆器屋に併設して銭湯も経営していたというから面白い。昭和の中頃までは自宅にお風呂の無い家が多く、当時の銭湯は多くのご近所さんたちが集まる賑やかな憩いの場だったのだろうと想像した。いまでもお店の天井裏には銭湯だったころの痕跡が遺されている。

海外との貿易が盛んになった頃からは漆器以外の高岡銅器や鉄器など金属製品の販売も

始め、その後、陶磁器を加えた全国各地の工芸品を取り扱うお店に変遷を遂げていく。

代表を務める和田隆史（わだたかし）さん（47）が家業を継いだのは今から約13年前のこと。それまでは水道資材の卸問屋の営業をしていた。隆史さんが過ごした幼少期の家業は景気が良く、商品もたくさん売れていた。隆史さんは人の出入りが多く賑やかだった昔を思い出し、会社を辞めて家業を継ぐことを決意するが、伝統的な工芸品を扱う商売には不景気の波が来ていた。周囲からは「商売を継ぐのはやめたほうがいい」と反対された。しかし、親だけは「来てもいいよ」と温かく迎え入れてくれた。



今回の主人公、和田隆史さん。優しい語り口でインタビューに答えてくれた。



店に入ると郷土玩具の鳥たちがお出迎えしてくれた。



場所は高岡大仏に向かって右側。ガラス張りの窓から中の様子が伺える。

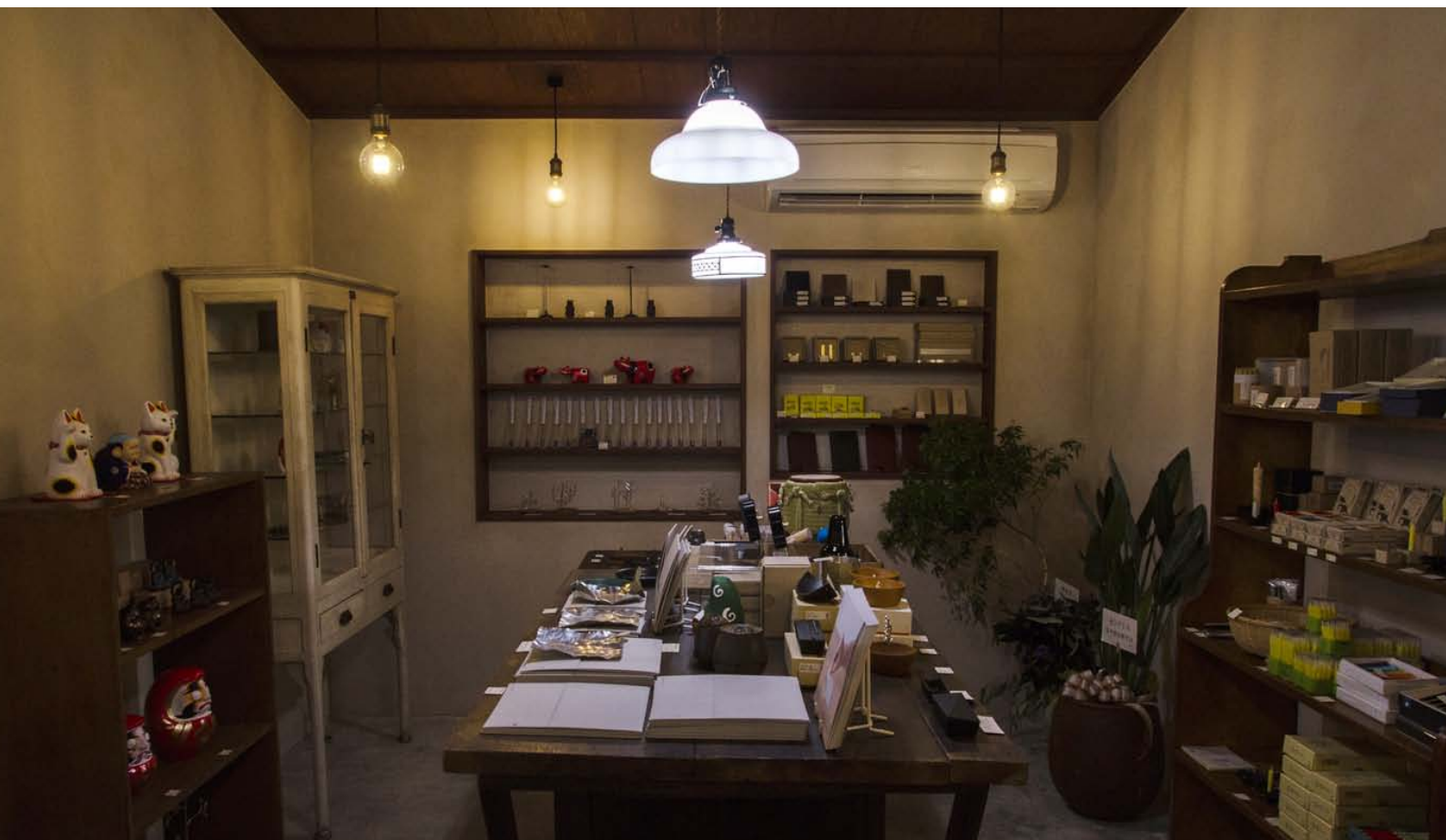


アーチを描く天井裏は、銭湯だったころの名残。銭湯は昭和49年まで営業していた。

だが、現実はやはり厳しく商品は全く売れない。父から梱包作業を教わったり、それまでの取引先の手書き台帳をデータに起こすだけで一日が終わる日々。それでもやれることは何でもやってみようと、商品開発の勉強会やセミナーへの参加、自社商品の開発そして販路開拓など思いつくものはなんでも手をつけてみた。特に販路開拓は月に数回は開発した商品を持って上京し、雑誌に載るような都内の有名店へ商品を持ち込んで営業に回った。

しかし、なかなか商品の仕入れ担当者に会ってもらえず、ようやく会ってもらえても取引は成立しない。機会を重ねることに「自分の感覚だけで、自分の思いだけで作ったものはただの自己満足に過ぎない」ということに気が付いた。自分の思いだけで作ったひとりよがりな商品は、受け入れてもらえないということが、いつしか担当者の表情を見るだけでわかるようになっていた。そして相手が求めるものは何か、人の役に立てるものは何かを考えるようになった。

家業を継いだ時には店舗運営と共にすでに自社のホームページを立ち上げていた雅覧堂。2007年からは高岡の伝統工芸品を扱う業界に先駆けてネットショップ（ECモール）への出店も始めた。出店当初は全く注文が入らず、たまに入る一件の注文に家族中が大喜びしていたという。売り上げが伸び悩む中、幼少期からパソコンを触る



隆史さんが長年かけて集めた古道具の家具が、什器として使われている。

ことが大好きだった隆史さんは、販路開拓で気付かされた「人の役に立つこと」を胸に、お客さんが知りたいことは何か、世の中のニーズは何かを探り続け、約5年をかけてデザインやコンテンツを充実させていく。インターネット上での買い物が当たり前になっていく世の中の流れに乗って雅覧堂のネット売り上げは徐々に右肩上がりになっていった。

現在運営しているECサイトのページは手描きのイラストが添えられ親しみやすさを感じる。リアルな店舗とは異なり、手に取って商品を見ることができないのがネットショップだが、雅覧堂のページは商品の使用感や使用シーン、製造方法が写真入りで詳細



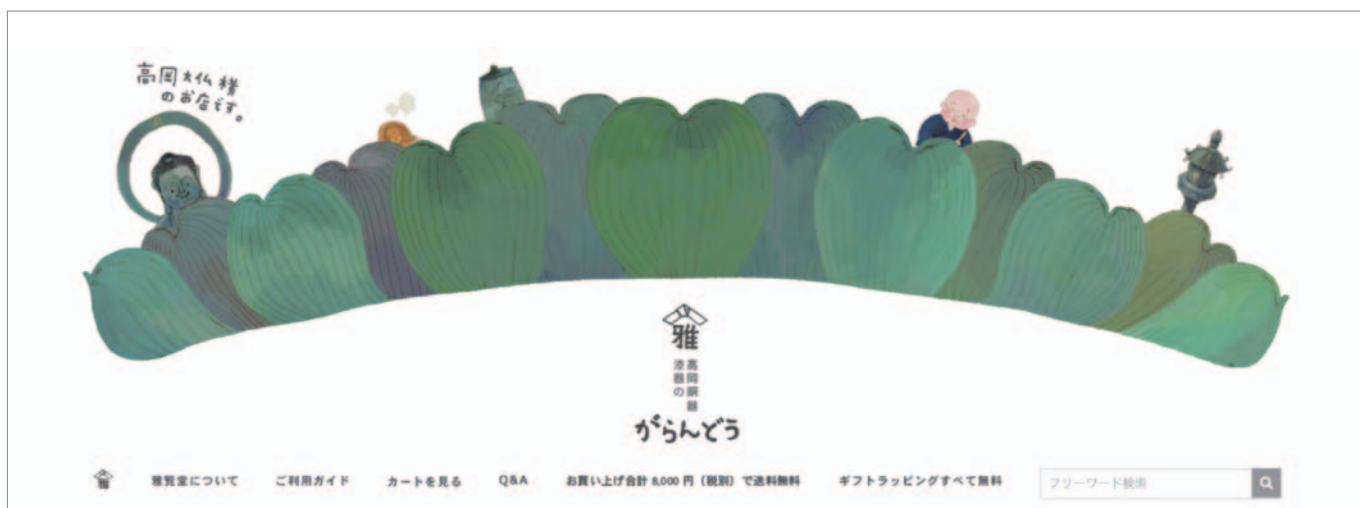
(左上) オリジナル商品の漆塗りブックカバー。(左下) スタッフによる手描きのプライスカードがかわいらしい。(右) 高岡鉄器の猿フックがこんなところに。



(上)旧店舗の前で。(下)新しくなった店舗と総勢16名のスタッフたち。



店舗から見える作業場の様子。人の動きが心地よい空間に、設計のこだわりを感じる。



ECサイトの一部。イラストが親しみやすさを与える。https://www.rakuten.ne.jp/gold/garandou/

に紹介され、選ぶ人が欲しい情報が細やかに掲載されている。話を聞くと、イラストは自社のスタッフが描き、ページのデザインもスタッフ間でセンスを共有しながら楽しんで作っているのだという。そのことが親しみやすさを与え「買いたい」と思わせる理由だろう。

現在従業員は家族も含めると総勢16名。女性ばかりの職場だ。家業を継いだ頃は家族3人で経営していたことを考えると新たな雇用を生み出し会社としても大きく成長している。リニューアルした店舗は同じフロアにスタッフが働く作業場が見える空間に生まれ変わった。古い木造校舎の教室の窓を彷彿とさせる格子窓からは若い女性たちが元気に働く姿が目に入ってくる。飲食店のオープンキッチンのように人の動きを感じながら滞在できるお店だ。

次の目標は？と聞くと、「昔のように人が集まるお店にしたい。お客さんだけではなく作る人も働く人もいろんな人が集まる場所になるようお店を育てていきたい」と最後に語ってくれた隆史さん。雅覽堂での思いが実現し、まちの中にも活気を与えてくれる日が待ち遠しい。



店先にかかる看板が目印。

# 課題のデザイン

高岡市デザイン・工芸センター

高岡市デザイン・工芸センターが実施する製品開発研究会「課題のデザイン」が2年の事業期間を経てこのほど最終成果展示を行う。

この事業は高岡の伝統産業における新産業創出を目指し、平成11年度からおおむね2、3年ごとにテーマを変え製品開発研究会として実施してきた。監修者にはデザイナーの安次富隆（あしとみたかし）さんを招き、地場企業のデザイン商品開発と市場開拓における「自活力」を育成するために参加者が自らデザインや製品開発に取り組む。現在までに市内からのべ100社ほどが参加してきた。

今回のテーマ「課題のデザイン」はデザインによる課題解決を図る取組みとして高岡の伝統産業界から課題を持った高岡銅器の間屋、メーカー、高岡漆器の職人やデザイナーなど12社14名が集まり、平成29年5月から研究会を開始した。

従来の銅器製品の販売が落ち込む中、銅器間屋はファブレスメーカーとしてどういうアプローチをしていけばよいかヒントを得ようと研究会に参加した(株)竹中銅器の喜多登さん。普段の業務ではインハウスデザイナーとして、カタログ製品（従来の高岡銅器製品）・特注の銅像などについて、製造現場と外部デザイナー、



## プロジェクトの流れ

### 一年目（平成29年度）

← 各自の課題紹介

← 企業訪問、ヒアリング

← 課題、デザイン・企画案決定

← 試作品製作

← ブラッシュアップ

### 二年目（平成30年度）

← 試作品検討

← ブラッシュアップ

← 仕様、価格等決定

← 試験販売 10月7日～3月25日

← 試作品検討、展示計画

← 成果展示 3月16日～3月25日

との通訳的な役割を担っている。

研究会では「間屋の優位性は素材の選択が自由なことであり、そのためにはメーカーや職人からのリサーチ力が今後の鍵を握る」という監修者である安次富さんのことばから、取組みテーマを「素材の発見を活かしたデザイン」とした。この研究会で(株)桜井孝一社長と出会い、鑄造技術を用いたときに表現できる鑄肌いばだを活かしたわさびおろしを共同で開発。（左ページ写真）従来の金属製おろし器具のように目立てによっておろし目を作るのではなく、高岡銅器のざらつとした鑄物砂のテクスチャーをそのまま生かすことでわさびをすり下ろすことができ、尚且つおろし目のパターンに裝飾性を持たせることもできるという今までにない発想の製品が完成した。

「課題そのものをどうデザインするかがこの研究会『課題のデザイン』の意味であり、課題を突き詰めていくことで解決のためのデザインやものづくりの方向性が見えてくるはず。デザインは目標達成のための行為そのものである。」と安次富さんは語る。課題のデザイン研究会は単に製品を「デザイン」し「つくる」のではなく、「何がどう自社にとって課題なのか」「それは本当の課題なのか」を自らに問い直すきっかけとなった。また、「個々の企業が自社の課題を他の作り手、売り手と共有することで、解決へのヒントが得られ、お互いの強みを活かした協力関係になれるのが高岡の面白さ。」とも安次富さんは語る。様々な立場のメンバーが集まったことで、この事業は産地全体の課題解決への小さな一歩になったのかもしれない。

「課題のデザイン展」では喜多さんが手がけた製品のほか、約20点が課題解決のための製品・デザインとして展示される。

こんな風に解決  
しました

鑄肌で食材をおろす「おろし板」

素材の発見を  
活かしたデザイン



1

私が取組んだ  
課題はこれです

木地の木目を活かした食器の制作

自分が  
欲しい  
漆器



2

楽しみながらアイデアを商品化

一人  
商売の  
楽しい  
経営



3

螺鈿の新分野への応用「螺鈿インターホンパネル」

・地域と  
関わる  
デザインの  
仕事

・金属に  
螺鈿の  
魅力を  
うつす



4

「意匠塗装」アーカイブプロジェクト

塗装  
技術の  
新分野  
展開



5

- 1 おろし板 | (株) 竹中銅器 × (株) 桜井鑄造 | ¥10,000 円～(税抜)
- 2 鍛木皿 (たんもくざら) | (株) 駒井漆器 | ¥4,600 円～(税抜)
- 3 プチフルール、プチパズ、プチプレート | (株) 秀正堂 | ¥2,500 円～¥4,600 円 (税抜)
- 4 螺鈿インターホンパネル | (株) ナガエ × 武蔵川工房 | 参考価格 ¥30,000 円～(税抜)
- 5 意匠塗装 | (株) 宮越工芸

上記掲載商品はほんの一部です。すべての商品は「課題のデザイン展」にてお披露目します。

### 「課題のデザイン展」

日時 平成 31 年 3 月 16 日 (土) ～ 25 日 (月) 10:00 ～ 18:00

会場 (株) 能作 本社内 NOUSAKU CUBE (富山県高岡市オフィスパーク 8-1)

内容 新クラフト産業・デザイン育成事業「課題のデザイン」平成 29・30 年度における開発品、パネルなどの展示。  
一部商品は、(株)能作 本社ロビーにて販売。

参加 14 名 (12 社)

監修 安次富隆 [プロダクトデザイナー、多摩美術大学教授]

主催 高岡市デザイン・工芸センター

## 生型鑄造法が伝統的工艺品に追加指定

平成 30 年 11 月、国の伝統的工艺品の高岡銅器なまがたに生型鑄造の技法が追加指定された。生型鑄造は大正期に高岡の嶋安次郎がこの技法を確立したといわれ、この鑄造法はコストを抑えて量産化に対応できる技法であることから高岡銅器の生産量が飛躍的に向上し、現在の産地化を推し進める原動力となった技術である。伝統的工艺品の指定には、決められた要件を全て満たす必要があり、この要件のひとつである「技術技法の確立から 100 年が経過した」という指定要件を満たしたことが証明され追加指定となった。これで高岡銅器で指定された技法は蝟型鑄造法ろうがた、焼型鑄造法やきがた、双型鑄造法そうがたに生型鑄造法が加わり 4 技法となる。



成果展示では、高岡市立博物館に所蔵される 4,000 枚の工艺品の図案の中から、明治期の図案「大橋三右工門 図案 花瓶一対」を選び、原型制作、鑄造、仕上げ、着色の工程を経て完成した花器が展示された。



新調した薬師寺水煙（上）工程説明の様子（下）

## 文化財の修復・再現に生きる高岡の技

現在解体修理が進められている奈良県にある国宝・薬師寺東塔の相輪の新調と修理を伝統工芸高岡銅器振興協同組合が受注し、このほど完成した。東塔は薬師寺で唯一奈良時代の創建当時から残る三重の塔で、相輪はこの塔の最上部の水煙、宝珠、竜車などから成る装飾物である。今回受注した相輪の新調では素材となる金属の配合から 3 D 原型の作成、鑄造、仕上げ、着色に至るまですべての作業を高岡市内で行った。納品に先立ち、新調された水煙すいえん、宝珠ほうじゆ、竜車りゆうしやおよび擦管さつかんと国宝の一部が 1 月 26 日、27 日の両日、高岡地域地場産業センターで展示公開された。これらの新調品は薬師寺に納品されたあと、東塔の最上部に取り付けられるため、国宝とともに身近で見られる貴重な機会として一目見ようと多くの来場者で賑わい、完成度の高さに感嘆する声が上がった。

また、期間中には同センターにて高岡の企業等で構成するコンソーシアム（共同体）が取り組んだ「先端技術と伝統技術の融合による文化財修復拠点化事業」の成果を披露する展示会が行われた。このコンソーシアムは鑄物で制作された文化財等の修復・再現の拠点づくりを目指して立ち上げられ、平成 29 から 30 年度は事業化に向けて必要な体制の構築、情報発信、市場調査、試作開発等に取り組んだ。



文化財修復拠点化事業成果展





スクールの様子



(上段) 演習課題 (下段) 3D プリンターによる出力品

伝統工芸産業人材養成スクール

## 3D造形コース

高岡市デザイン・工芸センターでは、伝統工芸産業界の技術力向上と後継者育成を図るため「高岡市伝統工芸産業人材養成スクール」を昭和43年度より実施しており、平成29年度末に50周年を迎えた。これまでの修了生は1,000人を超え、重要無形文化財保持者をはじめ、伝統工芸士、クラフト作家など、多くの人材を輩出している。

平成26年度に新設された「3D造形コース」では、3Dソフトウェア「shade 3D」を使用したデータの構築から3Dプリンター※<sup>1</sup>によるデータ出力まで、立体造形の基礎を学ぶことができる。講座は全10回、木曜日の18時～21時に実施※<sup>2</sup>しており、受講生のほとんどが3Dソフトウェアに初めて触れる初心者だ。

近年3Dをはじめとする先進技術によるものづくりが急速に発展しており、高岡でもその注目度は高い。伝統産業においては、文化財の修復や保存、製品の設計や原型製作の効率化、新しい形状や質感による表現の広がり等に期待が寄せられている。

受講生の多くは「いずれは主流となる3D技術を今のうちから学びたい」という。受講生は最大5名、ものづくりに興味のある初心者歓迎だ。少人数のため、個々のペースにあわせてじっくりと講座は進められる。「shade 3D」は統合型3DCGソフトとして幅広い機能を搭載しており、その扱い易さと関連ソフトの中では安価な点において、導入しやすいメリットがある。これまで多くのクラフトやプロダクトを手掛けてきた経験から、講師を務める元(公社)日本クラフトデザイン協会理事長の相川繁隆氏は、「3D造形コースでは、伝統工芸の新たな価値を創出するために、クリエイティブな場としての可能性を広げています。」と語る。

平成30年度は全10回の講座終了後、受講生がそれぞれに取り組んだ成果品を、富山県総合デザインセンターの高精度3Dプリンターで出力した。0.016mmの積層ピッチで作り上げられた造形品の精度に受講生からは感嘆の声が上がり、今後の活用方法に夢が膨らむ。

3D技術はこれからの時代のものづくりにおいて重要な技術の一つであり、3次元エンジニアも求められる人材となるだろう。養成スクールでは高岡の伝統産業界における3D入門として、次年度以降も3D造形コースの受講生を募集していく。

受講生の募集は毎年4月にWEBトップページ (<http://www.suncenter.co.jp/takaoka/>) にてお知らせいたします。

※1 養成スクールでは熱溶融積層方式の樹脂用3Dプリンターを2台導入。

※2 講座内容は平成31年3月現在のもの。

